

## 平成 28 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	28K23	氏名	堀田 武芝
研究主題 —副主題—	タブレットを用いたビデオ再生法による授業研究での若手教員育成 —アクティブ・ラーニング（主体的・対話的な深い学び）の実践を通して—		
派遣先	早稲田大学教職大学院	担当教官	田中 博之
所属校	世田谷区立中丸小学校	校長	百田 範恵

キーワード： タブレット アクティブ・ラーニング 授業研究

### 1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

中教審答申 184 号 (2015) は、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について 一学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて」の中で、①教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始め、かつてのように先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承をうまく図ることのできない状況があること、また、②経験年数の異なる教員同士のチーム研修やベテランの教員やミドルリーダークラスの教員がメンターとして若手教員等を育成するメンター方式の研修等の先進的事例を踏まえた校内研修の充実を図る方策について検討すること、そして、③教科等の指導に関する専門知識を備えた教えの専門家としての側面や、教科等を越えたカリキュラム・マネジメントのために必要な力、アクティブ・ラーニングの視点から学習・指導方法を改善していくために必要な力、学習評価の改善に必要な力などを備えた学びの専門家としての側面も備えることが必要である、ということ述べている。

これらのことから若手教員の授業力の向上を図ることは欠かすことのできない校内研修の一つになっていることが分かる。また、中堅以上の教員は、OJT や校内研修を通してアクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）の視点から若手教員の授業改善を図る力が求められていると言える。

本研究では、アクティブ・ラーニングの指導方法を若手教員に身に付けさせるために、タブレットを用いたビデオ再生法による授業研究の在り方を明らかにしていく。

また、本研究は若手教員の授業力育成を図るものであるが、それと同時に指導的立場にある中堅以上の教員が、効率良く若手指導をする際の一つの方法として汎用性のあるタブレットを用いたコーチング手法での授業研究を目指している。

### 2 研究の内容・研究の方法

○動画撮影を用いた授業研究

タブレットで撮影をした動画を振り返りで鑑賞し、授業鑑賞力や批評力を育てる。

① 動画を観る前に授業者の振り返りを聞く。（良

かったこと・うまくいかなかったところ)

② 振り返りで出た場面を、動画を観て意見交流をする。

③ 参観者が授業参観をして気付いたことを伝える。（良かったこと・課題）

④ 参観者が伝えた場面を、動画を観て意見交流をする。

⑤ 次時の課題を設定する。

○コーチングの手法を取り入れた授業省察

指導の際には、インタビューを取り入れたコーチングの手法（千々布 2008）を用い「傾聴」「承認」「質問」の手順で主体的な気付きを促す。

○A.L の授業づくり

A.L を成立させる 6 つの学習要素（田中 2016）学習ルール、学習スキル、学習プロセス、学習モデル、学習ツール、学習チーム）の定着を図る授業づくり

○A.L チェックシートの活用

教材研究に加えて、A.L チェックシート（田中 2016）を活用し、自己評価をさせる。

### 3 研究の結果

○A.L チェックシートから（5点満点で自己評価）

C 教諭			児童（クラス平均値）		
観点	10月	11月	観点	10月	11月
主体力	3.0	3.0	主体力	2.9	<b>3.0</b>
協働力	2.0	<b>2.7</b>	協働力	3.1	<b>3.3</b>
創造力	2.7	<b>2.8</b>	創造力	2.9	<b>3.0</b>
決定力	3.0	3.0	決定力	2.9	2.9
解決力	2.3	<b>2.8</b>	解決力	3.1	<b>3.2</b>
成長力	2.0	<b>2.3</b>	成長力	3.2	<b>3.3</b>

15 日間のアクティブ・ラーニングでの授業づくりで力を入れてきた協働性、問題解決力を中心に結果を見てみると、教師の評価で協働力が 2.0 から 2.7 に上がり、解決力で 2.3 から 2.8 に上がっている。児童の評価を見ても協働力・解決力で上昇が見られる。教師が意図していることが授業に反映されて、児童の変容につながっていることが分かる。

全体的に見ると、教師が授業改善に手応えをつか

んでいることが分かる。

#### ○授業者の振り返りシート（若手教諭自由記述）

（動画での振り返りをしてみて）

客観的に見る自分の姿から、多くのこと（視線が下がる癖、机間巡視での視点、喋る割合など）を学べた。自分の指示に対して児童がどのような反応をしていたのかがわかり、自分の授業がどのような雰囲気なのか知ることができた。

（アクティブ・ラーニングの授業づくりをしてみて）

児童の様子が変わり、授業全体が活気にあふれたように感じた。

講義形式の一方向的な授業ばかりしていたが、児童が自ら考え、話し合い、自ら答えを出す方法を知り、そうした指導をできるようになったことに、成長・高まりを感じた。

#### ○具体的な振り返りと授業改善

- ・カメラを教師に向けてビデオ撮影を行った。講義型の時間が長くなり児童の発言も少ない状態であったので、ペア学習を導入して自分の考えを表現することや友達の考えを知ること、二人で一つの答えを作ることを行った。ペア学習を導入することで、児童に思考させる時間を確保、達成感を持たせるための作業時間を確保することができた。
- ・机間指導の際、児童の学習状況の把握、その後の学習での素材探し、個別の指導・支援等の視点をもってできるようになった。
- ・カメラを児童に向けてビデオ撮影を行った。教師の話の聞いている児童の様子を振り返り、児童の興味・関心を引きつける導入になっていたかを確認したり、児童の課題把握や理解の様子を見たりするようになった。
- ・講義型授業にアクティブ・ラーニングの要素を取り入れたことで、児童が自ら考え、話し合い、学び合う姿が見られた。また、タイムマネジメントがしやすくなった。
- ・児童が主体的に学べる課題を設定した授業づくりをし、児童の交流活動を中心とした授業を行った。インタビュー活動やグループでの交流活動を意図的に入れることで、友達に自分から関わったり意見を言ったりすることが苦手な児童も笑顔で活動をすることができていた。自分で課題を設定すること、個人の活動の時間を確保することが、児童の主体的な活動を促すことにつながっていた。

#### 4 研究の考察

- ・これまでの先行研究では、アナログでの撮影やビデオテープでの再生を行っていたために、時間と手間がかかるという課題があった。しかし、タブ

レットを活用することで振り返りたい場面をすぐに再生することができるようになった。また、タブレット一台で撮影から振り返りまでを行うことができるので、授業研究のツールとして汎用性の高いものであることが分かった。

- ・VTR 中断法（吉崎 1991）は、「ポイントと思われる場面でビデオ再生を中断し、『もし、あなたがこの教師なら次にどのような教授行動をとりますか』と他の教師に意見を求める」ものである。また、カンファレンス（稲垣 1995）は、「45 分の授業を再生し、参加者全員が自分の立場から気がついたこと、発見したことなど自由に自分の意見を述べる」ものである。本研究では、振り返りたい場面を限定し視聴することに特徴がある。ビデオ再生をする場面を授業者へのコーチングから決定するため、授業者の内面から課題意識を芽生えさせた上で改善策を考えることができ、授業者の自己反省的な授業研究ができた。また、参観者が授業参観をして気付いたことを伝えることが、C 教諭が気づくことができなかった新たな視点をもつきっかけとなり、若手教諭の視野を広げることにつながった。さらに、再生場面を限定することで、授業研究にかかる時間を大幅に削減することができた。
- ・授業場面の動画を振り返りで鑑賞することで、C 教諭に授業鑑賞力や批評力がついてきた。他の教員の研究授業を参観した際に、ペア学習の仕方や机間指導の仕方について考えをもつことができるようになった。
- ・若手教諭が一人で動画を視聴し自らの課題を解決しようとする姿があり、自己の指導力向上を目指す、反省的実践家としての力が身に付いてきた。

#### 5 今後の展望

タブレットを用いたビデオ再生法による授業研究は、「授業者が自己の姿を客観視できること」、「コーチングの手法を用いることで振り返りの時間がかからないこと」、「授業者が自ら授業改善の方法を見つけていくこと」の点から効率的であり、かつ有効性が高いことが分かった。校内や区内での授業研究の際にタブレットでの撮影を行い、授業研究に活用していく。また、OJT の際に若手教諭の授業を撮影し、若手教諭の自己省察を促し、反省的実践家となる一助となる手立てとして積極的に用いていく。

タブレットの活用については、児童を対象とした授業での活用法は多くの研究がされているが、教師の授業力向上の点での活用については、研究がされていないので、授業研究でのより良い活用法を研究していく。

